

日本語の「タ形」における <完了性>

－ イタリア語との比較対照 －

マリアンナ・チェスパ*

(e-mail : mariannacespa@hotmail.com)

<目次>

- | | |
|----------------------------------|------------------------------------|
| 1. はじめに | 2.2. イタリア語の「複合時制」と日本語の「パーフェクト性」の関係 |
| 2. 日本語の「タ形」の <完了性> について | 3. 複文における「タ形」とその<完了性> |
| － イタリア語の近過去形との比較対照 | 4. 「分詞」について - 過去分詞を中心に |
| 2.1. 日本語の「タ」－ イタリア語・スペイン語・英語との対応 | 5. おわりに |

キーワード：完了性(Perfectivity)、複合時制(Compound tenses)、過去分詞(Past participle)

1. はじめに

本稿は、日本語の過去を表す時制「タ形」とその用法について考察することを目的としている。主に「タ形」における <完了性> に着目するが、その際にはイタリア語の過去を表す時制「近過去形」との比較対照を介してその <完了性> における性質を明確にすることも目的としている。そのために、英語との比較も行う。分析を行う際には、より正確な結果を得るために、「タ形」が単文において用いられているのか、あるいは複文において用いられているのか、また複文の場合、どの種類の複文において用いられているのかなども考慮に入れなくてはならない。その違いによって時制が表す <完了性> が変わる場合もあるからである。また、こういった <完了性> の概念は、外国語の日本人学習者だけでなく日本語の外国人学習者向けの言語教育の分野においても導入すべきであると考え。

* 北海道大学、非常勤講師、対照言語学・イタリア語学

2. 日本語の「タ形」の〈完了性〉について — イタリア語の「近過去形」との比較対照

先行研究においても注目されているのは、日本語には過去の出来事を述べるのに二つの言語的手段があるということである。それらは「タ形」と「テイル形」である。ただし「タ形」では、先行研究の用語で言う「完成相過去用法」¹⁾、つまり「現在から切り離された過去」と「パーフェクト相現在用法」、つまり「現在と結びついた過去」の二つの用法が可能となるため、疑問が生じてくる。代表的な疑問として、「タ形」は二重性をもつ時制であるか否かが挙げられるが、本稿では「タ形」が二重性をもつ形式であるという視点から分析を行う。さらに、「タ形」による意味を明確にするために、イタリア語の過去を表す時制との比較対照を行うこととする。その比較により従来の先行研究において触れられていない用法が明らかになると予測される。最初にイタリア語の過去を表す時制の基本的な機能に関して簡単に述べるが、参考のために次節では英語とスペイン語の過去時制も取り上げる。この比較により、イタリア語の「近過去形」と日本語の「タ形」における特徴的な二重性が明らかになる。

2.1. 日本語の「タ形」— イタリア語・英語・スペイン語との対応

本節では、日本語の「タ形」とそれに対応するイタリア語・英語・スペイン語の時制形式に関して述べていくが、英語とスペイン語に関して考察する際には基本的な用法にとどめ、主に日本語の「タ形」とイタリア語の「近過去形」のあいだに存在している相違点と共通点に着目していく。この比較対照は、「タ形」と「近過去形」の形成に含まれる「過去分詞」の機能を比較することを目的としている。また、この比較により「タ形」の多様性が明らかになると言えるだろう。

まず、イタリア語の場合、過去において起こった事態を表す場合、「近過去形」・「遠過去形」・「大過去形」・「半過去形」という時制形式が用いられる。そのうち日本語の「タ形」に対応する形式は、〈現在と結びついた過去を表す「近過去形」〉と〈現在から切り離された過去を表す「遠過去形」〉である。さらに、「近過去形」は過去の出来事を描写する「テイル形」にも対応する形式であると言える。また、日本語

1) 工藤 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房, pp.133-134, 141.

の「テイタ形」に対応する形式は「半過去形」と「大過去形」であるが、<継続> を表す「テイタ形」と <以前完成> を表す「テイタ形」の区別をしなくてはならない。なぜなら、「大過去形」は <以前完成> を表す「タ形」に対応するのに対して、「半過去形」は <継続> を表す「タ形」に対応するからである。ただし、以上のすべての対応は常に適用できるわけではなく、文の構造や文脈などを個々に判断しなくてはならない。しかし、本稿の主な目的は日本語とイタリア語の過去時制を比較することではないため、その制約などに関しては言及しない。

英語については、周知のように単純な時制体系をもつ言語であり、過去において起こった事態を表す形式として挙げられるのは「現在完了形」・「単純過去形」・「過去完了形」である。言うまでもなく、<現在と結びついた過去> を表すのが「現在完了形」であるのに対して、<現在と切り離された過去> を表すのは「単純過去形」である。また、「過去完了形」は <過去のある基準時点よりも以前に起こった出来事> を表す時制であるが、それは <以前完成> を表す「テイタ形」に相当するものである。

次に、スペイン語はイタリア語と同様にロマンス諸語に属する言語であるため、当然似たような時制体系をもっているが、いくつかの相違点も見られる。過去において起こった事態を表す時制として「現在完了形」・「点過去形」・「線過去形」・「過去完了形」が挙げられるが、「点過去形」というのは英語の「単純過去形」とイタリア語の「遠過去形」に相当するものである。また、用語からわかるように「過去完了形」は英語の「過去完了形」とイタリア語の「大過去形」に相当するものである。その一方、「線過去形」というのはイタリア語の「半過去形」に相当するものであり、日本語の <継続> を表す「テイタ形」²⁾に対応するものである。この時制形式の有無は、ロマンス語と英語のあいだにある重要な相違点であると言える。この3言語の時制体系とその対応は以下のようにまとめられる。

<表1> 過去時制

英語	スペイン語	イタリア語
現在完了形	現在完了形	近過去形
単純過去形	点過去形	遠過去形・近過去形

2) <継続> と <以前完成> は高橋 (1995) 『同土九章』ひつじ書房、pp.111-112による用語である。スペイン語とイタリア語の場合、用語は統一していないが、「線過去形」と「半過去形」は同じ機能を表している時制形式である。英語の場合、それに相当する独立した時制形式はないが、場合にもよるが、過去進行形により描写することが可能である。

過去完了形 なし	過去完了形 線過去形	大過去形 半過去形
-------------	---------------	--------------

上記の表1. からわかるように、二つの用法を可能とするのはイタリア語の近過去形のみである。この二重性の有無は、イタリア語の過去を表す時制と英語・スペイン語の過去を表す時制のあいだにある重要な相違点、また日本語の「タ形」との共通点であると言える。イタリア語の「近過去形」における二つの用法は、先行研究において「完了的用法」と「アオリスト的用法」と呼ばれ、前者は節1. に挙げた「パーフェクト相現在用法」のことを表すのに対して、後者は「完成相過去用法」のことを表す用語である。イタリア語は時制形式の数が多い言語であり、各時制における用法や機能が厳密に決まっているが、「近過去形」は他の時制とは異なり特徴的な時制形式である。同じくロマンス諸語に属するスペイン語とゲルマン語である英語における過去時制を比較することにより、その特徴がより明らかになる。一般的に、「近過去形」は英語とスペイン語の「現在完了形」に相当する形式であるとされているが、その適応範囲は限られていると言える。以下では <現在と切り離された過去> を示す例文を介して表1. の内容を説明する。

《日本語》

- ・ 昨日私は家族と一緒にピザを**食べた**。(現在と切り離された過去を示す「タ形」)

《英語》

- ・ I ~~have eaten~~ pizza with my family yesterday. (現在完了形)
- ・ I **ate** pizza with my family yesterday. (単純過去形)

《スペイン語》

- ・ Ayer **he comido** pizza con mi familia. (現在完了形)
- ・ Ayer **comí** pizza con mi familia. (点過去形)

《イタリア語》

- ・ Ieri io **ho mangiato** la pizza con la mia famiglia. (近過去形)
- ・ Ieri io **mangiai** la pizza con la mia famiglia. (遠過去形)

上記の例文を考察すると、英語とスペイン語の場合、発話時（現在）とのつながりを示す「現在完了形」と、発話時とのつながりを示さない「単純過去形（英語）」と「点過

去形（スペイン語）」による用法は厳密に決まっているが、「近過去形」はその区別を必要としない³⁾という相違点があるということが明らかになる。このように、英語とスペイン語の場合、yesterday と ayer（昨日）という過去における特定の時間を表す表現があるため、現在との関わりを示す現在完了形の適用が不可能となり、単純過去形と点過去形の適用のみが認められる。それに対してイタリア語の場合は、ieri（昨日）が表出されているにもかかわらず、現在との関わりを示す近過去形の適用も可能となる。したがって、イタリア語の近過去形とは異なり、英語とスペイン語の現在完了形の適用範囲は限定されており、現在完了形は二重性をもつ時制形式ではないことがわかる。このように、上記の例文は近過去形による「アオリスト的用法」を明確にするものであると言える。用語の統一のために、本稿では日本語の場合においてもイタリア語の場合においても、「完了的用法」と「アオリスト的用法」という用語を用いることとする。「アオリスト」は古代ギリシャ語の動詞のアスペクトの一つであるが、「完了」「継続」「反復」とは無関係であり、単に一つの出来事として動作を示すものである。このことからわかるように、「アオリスト的用法」を認める近過去形は、発話時以前に起こった事態を表すが、その事態は現在とは無関係なものである。

これまでこの二つの用法に関して述べてきたが、本稿では日本語とイタリア語のそれぞれの時制が表す <完了性> を比較して、そこにどのような相違点と共通点が存在しているかということに着目する。そのために、以下では「完了的用法」を認める近過去形と「完了的用法」を認める「タ形」のみを取り上げていく。ただし、その前に、各時制が表す <終結> と <完了> の区別をしておかなければならない。

本稿では、<完了>という用語を発話時（現在）と結びついた過去を表す「タ形」と「近過去形」（英語とスペイン語の場合の現在完了形）に用いることにするが、発話時（現在）から切り離された過去を表す「タ形」と「近過去形」（英語の単純過去形とスペイン語の点過去形）には、<完了>ではなく <終結> を用いることとする。なぜなら、<完了>は基本的に <以前に起きたことが、問題にしている時点において完了していること>を示すからである。それに対して <終結>は、<過去において終わっていること>を示す。日本語の「タ形」は <終結>も <完了>も可能とする時制であるが、次節に述べられているように、日本語において <完了>を表す時制形式として、「タ形」のほかに「テイル形」と「テイタ形」も挙げられる。「テイル形」は現在または未来に

3) 現代イタリア語では、近過去形による <アオリスト化> という現象が見られる。「近過去形」は「遠過去形」の適用範囲まで広がるという現象である。現在、「遠過去形」の使用は主に歴史的な文章や小説に絞られている。ただし、南部イタリアでは日常会話においても用いられている。

おける完了を表すのに対して「テイタ形」は過去における完了を表すが、「タ形」も〈現在における完了〉を表す時制であると言える。同様に、イタリア語の「近過去形」においても、〈（現在における）完了〉と〈終結〉を表す両方の用法が可能である⁴⁾。

2.2. イタリア語の「複合時制」と日本語の時制の「パーフェクト性」の関係

本節では〈完了〉という概念が中心となるため、「タ形」と「近過去形」による「アオリスト的用法」ではなく、「完了的用法」のみを取り上げることとする。言い換えると、〈終結〉ではなく、〈完了〉を表す時制のみを取り上げることとする。「タ形」による「完了的用法」と言うと、前節において考察した一般的な用法、つまり〈発話時（現在）における完了〉を表す用法のことになるが、それは単文における用法である。本節では複文も考察し、その結果、〈発話時における完了〉と異なる用法も可能であるということに着目していく。その前にまず、イタリア語の近過去形の「完了的用法」が可能となる用法に関して簡単に述べる。

イタリア語の近過去形による〈完了性〉に関しては、近過去形が表す〈完了性〉は一つではなく、〈実現した完了〉と〈未実現の完了〉の二種類に分けるべきである。言い換えると、前者は〈現在における完了〉であるのに対して、後者は〈未来における完了〉である。この前提に基づいて日本語と比較していくが、一般的に発話時点における完了のみを表す時制であるとされている「タ形」も、近過去形による上記の区別が可能とする時制であるのか否か、つまり〈未実現の完了〉を表すのか否かという疑問が当然生じてくる。以下に例文を挙げる。

【実現した完了】 〈発話時点以前 = 現在における完了〉

- (1) Lui ha letto la Divina Commedia. (ha letto = 近過去形)
彼は神曲を読んだ。(または「読んだことがある」)

【未実現の完了】 〈発話時点以後 = 未来における完了〉

- (2) Un altro esame ancora e ho finito il corso. (ho finito = 近過去形)
試験をもう一つ受ければ課程を修了する。(終了した)

4) 英語とスペイン語の場合、「現在完了形」は〈完了〉のみを表すのに対して、「単純過去形」と「点過去形」は〈終結〉のみを表す時制である。イタリア語の「遠過去形」も〈終結〉のみを表すということが明らかである。

例 (1) においても (2) においても近過去形が用いられているが、近過去形が表す <完了性> が異なることが明らかである。例 (1) の場合、「読む」という出来事は発話時点以前に起こった出来事⁵⁾であるが、それとは異なり例 (2) ⁶⁾の場合、「修了する」という出来事はまだ実現していない出来事である。このように、近過去形は現在における完了のみではなく、過去時制でありながら未来的な用法も可能とする時制形式であるということがわかる。よって、現在における <完了> に限らず未来における完了⁷⁾も考えられるが、それを表す時制は言語によって異なる。ただし、複文の種類によっては、近過去形が常に未来的な用法を可能とするとは限らない。

ではなぜ近過去形は <現在における完了> 以外の用法も可能とするのか、という疑問に対してついでに説明していく。結論から言うと、近過去形は「複合時制」であるためだと言える。イタリア語の時制形式は「単純時制」と「複合時制」に分けられ、前者として挙げられるのは「現在形」・「半過去形」・「遠過去形」・「未来形」であるのに対して、後者として挙げられるのは「近過去形」・「大過去形」・「先立未来形」である。「複合時制」というのは、<助動詞 *essere* (英: *be*) または *avere* (英: *have*) と過去分詞⁸⁾> との組み合わせによって形成されるものであり、英語の「完了形」に相当するものである。また、スペイン語においてもその分類が適用される。「複合時制」は過去分詞により形成されるものであるため、<完了性> をもつ時制であると考えてもよい。ただし、各時制が表す完了性は異なるものであり、それは助動詞の時制による違いである。つまり、助動詞の時制を観察することによって、当該事態の <完了> がいつのことであるか (すなわち、時間軸における位置づけ) がわかるのである。

《イタリア語の「複合時制」》

・ 近過去形 → 助動詞の現在形 + 過去分詞

- 5) イタリア語では、日本語の「～したことがある」という経験を表す独立した表現が存在しておらず、文脈の助けを受けて近過去形を用いることによってその意味が伝わる。そのため例 (1) では、「読んだ」という解釈も「読んだことがある」という解釈も認められる。
- 6) 例 (2) は、イタリア語の場合は等位節となっているのに対して、日本語の場合は条件節となっている。それは、自然な訳を得るためである。(直訳: 試験をもう一つ受けて、課程を修了する)
- 7) 当該例文は等位節であるため近過去形の適用が認められている。
- 8) イタリア語の「近過去形」は、英語の「現在完了形」に相当する形式であるが、英語とは異なりイタリア語の場合、*be*動詞に相当する“*essere*”動詞も用いることができる。その場合、移動・存在・変化・状態を表す自動詞の場合に限られている。スペイン語は、イタリア語と同様にロマンス諸語に属する言語であるにもかかわらず、英語と同様に「現在完了形」の助動詞として“*haber*” (英: *have*) のみを認める。

- ・ 先立未来形 → 助動詞の未来形 + 過去分詞
- ・ 大過去形 → 助動詞の半過去形 + 過去分詞

上記からわかるように、近過去形により描写された事象は〈現在における完了〉、先立未来形により描写された事象は〈未来における完了〉、大過去形により描写されたものは〈過去における完了〉を表すものであると言える。同様に、英語とスペイン語における完了時制（現在完了形、過去完了形、未来完了形）も助動詞と過去分詞との組み合わせで成り立つものであり、「複合時制」と呼ぶことができる。

各言語における以上の三つの「複合時制」の用法を観察すると、工藤（1995）が導入した「パーフェクト性」との相違点が多いことがわかる。工藤（1995）では、「現代日本語のパーフェクト性をめぐっては、従来、〈完了〉という用語のもとに、「タ形式」における場合のみを取り上げて、問題とされてきた。が、むしろ、テイル（テイタ）形式の場合のほうが、テンスから相対的に自立した形で、パーフェクトというアスペクトの意味を表していると思われる」とされている。また、工藤（1995）は、「テイル形」と「テイタ形」は派生的な意味をもつとし、パーフェクト性は、「〈継続性〉とは異なり、〈後続時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存〉」⁹⁾を表すものであるとしている。派生的意味として、〈反復性〉と〈単なる状態〉も挙げられているが、本稿では扱わないこととする。

こういった「パーフェクト」はどのようなものであるのかという疑問が生じてくるが、工藤（1995:99）では、「パーフェクトはある設定された時点において、それより前に実現した運動がひきつづき関わり、効力をもっているもの」と定義されている。また、その設定された時点（設定時点）の位置に応じて「現在パーフェクト」・「過去パーフェクト」・「未来パーフェクト」が可能になるとされている。このパーフェクトの規定に際しては次の三点が重要であるとされる。

- I. 発話時点、出来事時点とは異なる〈設定時点〉が常にあること。
- II. 設定時点に対して出来事時点が先行することが表されていて、テンス的要素としての〈先行性〉を含んでいること。
- III. 単なる〈先行性〉ではなく、先行して起こった運動が設定時点との結びつき＝関連性をもっていると捉えられていること。つまり、運動自体の〈完成

9) 工藤（1995）は「パーフェクト性」を表す例文として次のものを挙げている。

- ・ その本なら、一度読んでいるよ。
- ・ 病院に駆けつけたとき、父はすでに30分前に死んでいた。

性>とともに、その運動が実現したあとの<効力>も複合的に捉えるというアスペクト的要素ももっていること。

工藤（1995:97-98）は以下の例文を挙げているが、本節では「テイル形」と「テイタ形」の用法ではなく、「タ形」の適用が可能であるか否かということに注目していく。

【未来パーフェクト】

a. あなたが家庭を持つ頃には、私はもうとつくに死んでいるわよ。 「死んだ」

【現在パーフェクト】

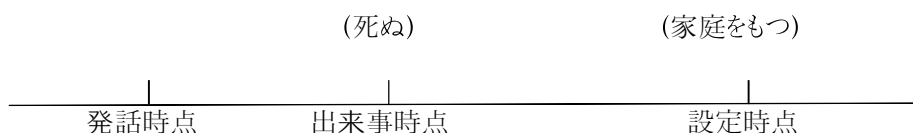
b. 私の父は、ガンでもう死んでいる。 「死んだ」

【過去パーフェクト】

c. 私が帰郷したときには、父は既に3時間前に死んでいた。 「死んだ」

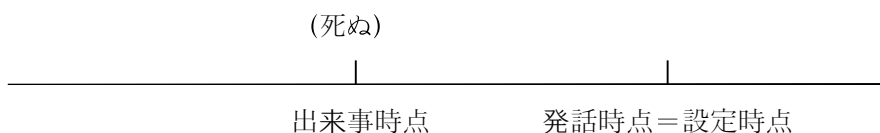
上記の例文を次のように図示することができる。

a. あなたが家庭を持つ頃には、私はもうとつくに死んでいるわよ。



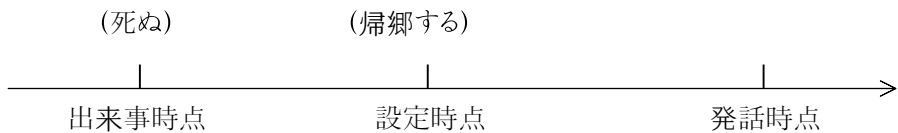
この場合において、「タ形」の適用は不可能である。なぜなら、「タ形」は一般的に未来的な用法を可能としない時制であるからである。この場合には未来的な用法を可能とする「非過去形」（「テイル形」）の適用が強制的となる。ただし、次節において述べられているように、未来的な用法を可能とする「タ形」もあるが、それは複文の種類によるものである。

b. 私の父は、ガンでもう死んでいる。



この場合、「テイル形」のみではなく、「タ形」の適用も可能となる。なぜなら、すでに言及したように、「タ形」は発話時点以前に完了した出来事を表すことができる時制形式であるからである。そのため、この場合において「タ形」と「テイル形」の置き換えが可能となる。最後に、例 c. を考察していく。

c. 私が帰郷したときには、父は既に3時間前に死んでいた。



例c.の図示からわかるように、ある過去の時点において完了した出来事を表すために用いられる時制は「テイル形」ではなく「テイタ形」であり、この場合には「タ形」の適用も不可能である。なぜなら、「タ形」は基本的に、他の時制により描写された事態との先行性を表す機能をもっている時制ではないからである。また、「テイル形」の適用も不可能であるのは、当該例文は発話時との関係を表さない例文であるため、当然発話時と何らかの形で発話時点と関係づけている「テイル形」とは対立するからである、と説明できる。それとは異なり、周知のように「テイタ形」は発話時点との関係を考慮に入れる時制ではないため、この場合においては「テイタ形」の適用が必須であると言える。

なお、上記の例 a. b. c. において用いられている時制形式は、イタリア語に訳した場合、どのような時制形式が用いられるかを以下に説明していく。前述のように、イタリア語の三つの「複合時制」は、「現在パーフェクト」・「未来パーフェクト」・「過去パーフェクト」と共通点をもっているが、どのように対応するかという疑問が生じてくる。まず、例 a. の「死んでいる」は *sarò morto* (先立未来形) になるのに対して、例 b. の「死んでいる」は *è morto* (近過去形) となる。例 c. の「死んでいた」は *era morto* (大過去形) になる。上記の例文からわかるように、日本語の「テイル形」とは異なり、イタリア語の場合、〈現在における完了〉と〈未来における完了〉は同じ時制形式により描写されることが不可能である。このように、助動詞(*essere / avere*)の時制(現在形・未来形・半過去形)の使い分けにより事態の完了を時間軸に位置づけることができる。ただし、本節で例文を介してすでに言及したように、イタリア語の近過去形は未来的な用法も可

能とする時制形式であるが、複文の種類によりその用法が認められない場合もある。

以上のことからわかるように、英語との比較をするとイタリア語の「近過去形」は英語とスペイン語の「現在完了形」、「先立未来形」は英語とスペイン語の「未来完了形」¹⁰⁾、「大過去形」は英語とスペイン語の「過去完了形」に相当する形式であるという単純な結論に至るが、各時制による用法や機能をより詳しく考察するとイタリア語の時制と英語またスペイン語の時制のあいだにはいくつかの相違点が存在しているため注意を要する。また、本節で取り上げられているイタリア語の三つの複合時制も英語・スペイン語の完了時制も工藤（1995）が挙げた三点（上記のI, II, III）を満たすものであるとも言える。特に、「<設定時点> が常にあること」というのは、イタリア語の「複合時制」の特徴であり、その有無は「複合時制」と「単純時制」における主な相違である。言うまでもなく、<先行性> も同様である。なぜなら、過去分詞はある時点における <完了> を表すものであるため、当然ある時点との先行性を表すのである。

このように、<完了性> をもつイタリア語の「複合時制」と、<完了性> をもつ日本語の「タ形」・「テイル形」・「テイタ形」のあいだには共通点があるということが明らかになった。ただし、これは用法の一部におけるものであり、どの場面においてもそうであるとは言えない。

本節の例文に関しては、次のことも言える。例（2）の場合、日本語において用いられている時制形式は「非過去形」（「ル形」）であり、「タ形」を認めるのは例（1）のみである。この現象が起きるのは、工藤（1995）も主張しているように、「タ形式は、<現在パーフェクト> としか表せないのである」からである。つまり、「タ形」は <過去パーフェクト> と <未来パーフェクト> を表すことができないということである。この工藤（1995）の主張は、本節の例 b. に当てはまるものである。例 b. からわかるように、日本語の「タ形」の適用が認められているのは <現在パーフェクト> の場合のみである。その理由は、先行研究においても論じられているように、日本語では未来的な用法を可能とするのは「非過去形」のみであるからである。それに対して「タ形」の <完了的用法> は、発話時点において完了した出来事のみを表すことができるとされている。しかし、より詳しい分析をすると完了的な「タ形」も近過去形と同様に未来的な用法を可能とする場合が

10) 英語には独立した「未来形」がないが、「未来を表す表現」はある。本稿で扱われている「未来完了形」もないはずであるが、日本で実施されている英語教育では「未来完了形」という時制形式が一般に取り上げられている。よって、用語の統一のために本稿でもそれに合わせて「未来完了形」という用語を用いることとする。

あることがわかる。その場合には例 (1) と (2) には異なる状況が求められる。その用法を明確にするためには単文と複文の区別、また複文の種類別の区別をする必要があり、これは本稿の一つの主張である。以下の例文を参照しよう。

(3) 読んだ本を戻しておいてください。

Riportate *i libri letti*. (letti = 過去分詞)

例 (3) の場合、「読んだ」における「タ形」は、すでに実現した事実のみではなく過去形でありながら実際にはまだ実現していない事実の描写をも可能とするものと言える。なぜ例 (3) の場合においてはこの用法が可能となるかという疑問が生じるが、そのことに関しては次節において述べていく。

3. 複文における「タ形」とその〈完了性〉

各時制形式の機能に関して述べる際に正確な結果を得るためには単文と複文の区別をする必要があり、その例として「タ形」が挙げられる。これまで考察してきたように、「タ形」が単文において用いられると〈発話時以前に起こった事態〉¹¹⁾を表すが、前節の例 (3) からわかるように、複文において用いられると発話時点以降に起こる事態の完了を表すことも認められる。ただし、どの複文においても可能となる用法ではなく、ある種類に限られる用法であるためその区別を常に考慮に入れなくてはならない。以下に、「引用節」と「名詞修飾節」の順番に沿って、その相違を明確にする例文を挙げる。

(4) 妹は雨が降ってきたよと教えてくれた。

【引用節】

Mia sorella mi ha detto che ha piovuto. (近過去形)

周知のように、「～と」節が過去形をとるとき、主節の事態の成立時点を基準として、「～と」節はその事態以前に位置づける。例 (4) において、「～と」節の過去形は、「教えてくれた」という事実以前に「雨が降ってくる」という事態が起こったことを表している。つまり、主節における時制と従属節の時制は厳密に繋がっており、従属節の時制は主

11) 〈終結〉の場合でも〈完了〉の場合でも「タ形」は〈発話時以前に起こった事態〉を表す。

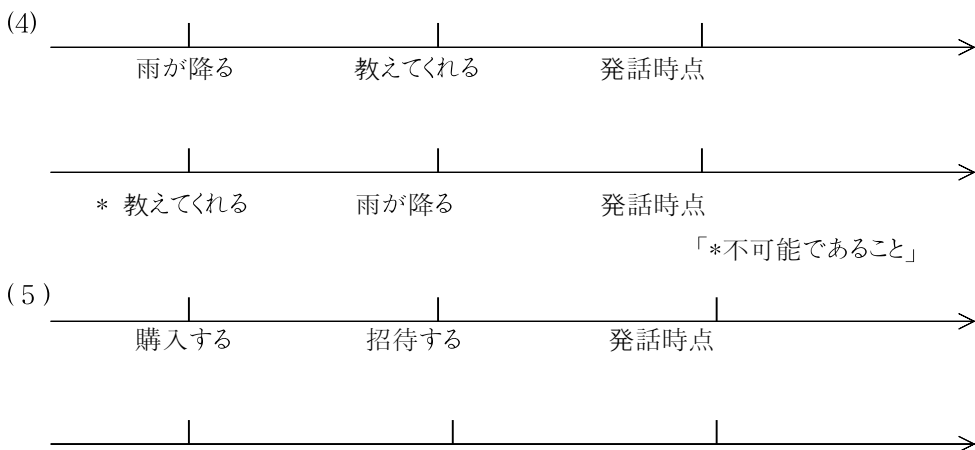
節の時制によって決まる。このように、引用節の場合、従属節における「タ形」は常に主節における時制の先行関係を表しているため、「タ形」による未来的な用法が不可能となる。

上記の例 (4) をイタリア語にすると、日本語と同様に「降る」と「教える」という順番になり、従属節の近過去形 “ha piovuto” (降った) は主節の近過去形 “ha detto” (教えてくれた) に対する先行関係を表す。引用節の場合、文法上の制約¹²⁾があり、時制形式を選択するに当たって主節と従属節の間の時間的な関係を常に考察しなくてはならない。そのため、「タ形」も「近過去形」も主節に対する先行関係のみを表すのである。それとは異なり、以下の名詞修飾節では、日本語においてもイタリア語においても二つの事態の時間的な関係は決まっているものではないため曖昧な解釈が生じると言える。

(5) 太郎は赤い服を購入したあの女性を招待した。 【名詞修飾節】

Taro ha invitato la donna che ha comprato il vestito rosso.
(近過去形)

上記の例 (4) と (5) における時間的な解釈、つまり事態の時間軸における位置づけを考察すると、同じく主節においても従属節においても過去時制が用いられているにもかかわらず、ある相違が現れることがわかる。例 (4) では二つの事態の時間的な関係が固定されているのに対して、例 (5) では事態の時間軸の位置づけが曖昧になっている。そのため、後者では二通りの解釈が生じる。この相違は以下のようにまとめることができる。



12) 英語と同様に、イタリア語においても「時制の一致のルール」があるが、主節の動詞の意味や複文の種類などにより変わるためより複雑である。

招待する

購入する

発話時点

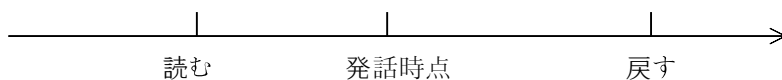
このように、複文の場合には主節の動詞と従属節の動詞の相関関係を考察する前に複文自体を判断しなくてはならないということが明らかである。なぜなら、複文の種類により事態の時間的な解釈、つまり事態の時間軸における位置づけが変わるからである。ただし、重要なのは、主節の事態と従属節の事態の時間的な相関関係が変わるにしても、発話時点に対する時間的な関係は変わらないということである。図示からも明確であるように、例(4)と例(5)の共通点は、いずれの事態も発話時以降に起こった事態ではないということである。つまり、この場合「タ形」を未来的に使うことはできない。

このように、上記の例文を考察するとイタリア語の「近過去形」も日本語の「タ形」もどちらの場合においても発話時点以前に起こった事態のこと、つまり〈実現した完了〉のみを表すため、その点では引用節と名詞修飾節の区別をする必要はないように見える。しかし、すでに例(3)を挙げた際に言及したように、「タ形」には〈未実現の完了〉を表す用法も認められる。また、すでに本節で触れたように、この用法は引用節においては不可能な用法である。もう一度、例(3)に関して考察してみよう。

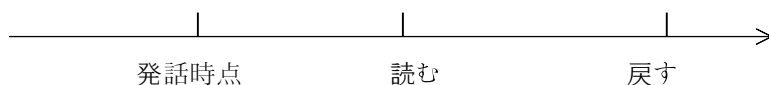
(3) 読んだ本を戻しておいてください。

例(3)の場合、「読んだ」における「タ形」は、過去形でありながらまだ実現していない事態の描写を可能とする形式として言及したが、実はこの「タ形」は二つの解釈を可能とする。つまり、発話時点以降に成立する主節の事態に対する完了の描写の他に、一般の発話時点以前の完了を描写することも可能である。よって、発話時点との相関関係は考慮されないということになる。図示すると、例(3)における「読んだ」の解釈は以下のようになる。

(3) a. 読んだ本を戻してください。 【過去】



b. 読んだ本を戻してください。 【未来】



前者はすでに読んだ本を戻すという意味を伝える「タ形」であるのに対して、後者はその本はまだ読んでいないが、読み終えたらすぐに戻すという意味を伝える「タ形」である。つまり、「読む」という事態がいつ <完了した> ということに焦点が当てられていることになる。言うまでもなく、前者の「読んだ」は <現在における完了> を表すのに対して、後者は <未来における完了> を表すものである。このように、当該例文の「タ形」は二通りの解釈を認める例文であるが、これは名詞修飾節内の「タ形」による特殊な用法である。ただし、同じく名詞修飾節であるにもかかわらず、「タ形」による <完了性> が変わるということが例 (3) と (5) の比較から明確になる。つまり、例 (3) とは異なり、例 (5) の場合、事態が発話時以降に <完了した> という解釈は不可能である。なぜこのような相違が生まれるのかという疑問が当然生じるが、その理由として本稿では、名詞修飾節のタイプにより「タ形」の機能が変わるためであると考えられる。まず、名詞修飾節の定義として、「文中の名詞の指示対象を限定したり情報を付け加えたりするために名詞の前に置かれた節は <名詞修飾節> と呼ばれる」が挙げられる。このことから、「読んだ本」の「読んだ」はテンス的な機能をもっているものではなく、形容詞のような役割を果たしていると考えられる。テンス的な機能をもっていないというのは、文脈の助けがない限り時間軸における位置づけに関する情報が与えられていないという意味である。また、形容詞として扱ってもよいか否かという視点のみに基づいて分析すると、例 (3) と例 (5) の相違が現れないため、それと異なる視点にも基づいて分析すべきであると考えられる。また、例 (3) における「タ形」が形容詞のような働きをしているか否かということを明らかにするためには、イタリア語と英語の過去分詞の働きを考察すればよい。そのため、次節では「分詞」による機能に関して述べることにするが、その前に例 (3) をイタリア語にするとどのような時制形式が選択されるかについて述べていく。イタリア語においても、名詞修飾節内の「タ形」は形容詞のような役割を果たしているか否かということを考察してみる。

(3) 読んだ本を戻しておいてください。

a. Riconsegnate i libri letti. <過去分詞>

b. Riconsegnate i libri che avete letto. <近過去形>

c. Riconsegnate i libri **che** avrete letto. 13) <先立未来形>

以上のイタリア語訳から、例(3)の日本語の「読んだ」は一つだけではなく、三つの言い方に訳することができることがわかる。どのような相違があるかを順番に説明していく。

まず、a.の「過去分詞」の“letti”は、日本語の「読んだ」により近い訳であると言える。なぜなら、その過去分詞は日本語の「読んだ」のように、時間的な曖昧さを含むことができるからである。このように過去分詞は、過去の事態としての解釈と未来の事態としての解釈の両方を可能とする。これは、「過去分詞」には事態を時間軸に位置づける機能ではなく、<完了>を表す機能があるからである。当該例文においては過去分詞が単独に用いられているため、テンス的な意味ではなく事態が<完了した>という情報のみに焦点が当てられている。しかし、助動詞と共に複合時制に用いられた場合には、事態がどの時点(過去、現在、未来)において<完了した>かについての情報が得られる。

イタリア語でも、形容詞と過去分詞が同形である場合があり、過去分詞は形容詞のような機能¹⁴⁾を果たすこともできると言える。例えば、例(3)の“i libri letti”の“letti(読んだ)”は、語順¹⁵⁾のことも考慮に入れると、形容詞のような役割を果たしている過去分詞であると言ってよい。この場合の“letti”は、すでに言及したように、過去における実現を表す形式であるか、あるいは未来における実現を表す形式であるかが曖昧である。よって、この点に関しては日本語の用法とイタリア語の用法は同様であると言える。ただし、日本語とは異なり、イタリア語にはその曖昧さを避けることを可能とする言語的手段があり、それは b. と c. に用いられている関係代名詞“che”(英:“that”)を用いるものである。関係代名詞を用いると単独過去分詞の適用が不可能となり、時間的な関係を判断して時制形式を適用しなくてはならないということになる。名詞修飾節(関係節)では単純時制の適用も可能であるが、<完了>というニュアンスを伝えるためには過去分詞により形成される「複合時制」を用いればよい。したがって、関係代名詞“che”を用いると<現在における完了>を表す時制形式と<未来における完了>を表す時制形式を用いることになるため、単独の過去分詞による曖昧さがなくなり、事態の時間軸における位置づけが明らかに

13) “Dopo che li avrete letti”(読んだ後に)という表現のほうが自然であるが、そのように訳すと関係節ではなくなる。イタリア語や英語の場合、名詞修飾節のことを「関係節」と呼ぶ。

14) 先行研究では、イタリア語の近過去形はラテン語の形容詞から派生したものであるとされている。

15) 英語とは異なり、イタリア語では形容詞が修飾する名詞の後に置かれる。例(3)のイタリア語訳を“letti i libri”に変えると過去分詞“letti”の機能も変わり、テンス的な意味が入るため形容詞的な機能はなくなる。

なる。その場合、すでに読んだ本なら <発話時（現在）における完了> を表す「近過去形 (b.) “che avete letto”」が用いられるのに対して、まだ読んでいない本であるなら <未来における完了> を表す「先立未来形 (c.) “che avrete letto”」が用いられることになる。日本語にはこのような言語的手段が存在していないため、正確な解釈を得るためには文脈などを考察して判断しなくてはならない。ただし、この場合の「タ形」はどちらの場合においても <完了> を表すものであるため、複合時制の過去分詞のような役割を果たしていると本稿では考えている。

上記の事例をまとめると、次の二つのことが言える。一つ目は、名詞修飾節における「タ形」の機能と引用節における「タ形」の機能は異なるものであるということであり、二つ目は、名詞修飾節における「タ形」は二つの解釈を可能とする場合があるということである。その場合、「タ形」は形容詞の役割を果たし <未実現の完了> を表すこともできるため、<現在における完了> のみでなく未来における完了も表すことができるからである。前述のとおり、本節では名詞修飾節における「タ形」は場合により形容詞的な機能を果たしていると述べてきたが、これはすべての名詞修飾節の「タ形」に適用できるわけではない。

本論では名詞修飾節の「タ形」が、英語やイタリア語のような言語にある「分詞」とつながっているものと考えられるため、次節では分詞と名詞修飾節の相関関係に関して述べていく。

4. 「分詞」について — 過去分詞を中心に

前節で言及したように、名詞修飾節における「タ形」が形容詞的な役割を果たしているということが、本稿で強調したい点である。ただし、名詞修飾節はその種類により非過去形と過去形の現れ方が異なり、「ル形」のみが認められる場合と「タ形」のみが認められる場合もあるため、その区別に関しても述べなくてはならない。一般に名詞修飾節は以下のように分類される¹⁶⁾。

《格成分名詞修飾節》は、主節事態の成立時を基準として、非過去形と過去形を使い分ける。つまり、主節における事態の成立時を基準として事態を時間軸に位置づける。

16) 『現代日本語文法③』 (2003) p.168

(6) 私が買う／買った本は値段が高い。

《相對名詞修飾節》と《付隨名詞修飾節》では、非過去形・過去形のどちらか一方しか用いられないものがある。

(7) 私は祖父が亡くなる／亡くなった翌年に上京した。

(8) ドアを叩く／叩いた音が夜更けに聞こえた。

例(7)の「翌年」は、名詞修飾節の事態が起きた時点を基準として設定するため過去形のみが現れる。それに対して、例(8)の「音」は、名詞修飾節の事態が起こると同時に発生する事柄を表すため非過去形のみが現れる。

以上の名詞修飾節を英語およびイタリア語に訳した場合、名詞修飾節内の「ル形」「タ形」がどのように現れるか、つまり関係代名詞の適用が必要になるか否か、また必要な場合、どの時制形式が適切であるかなどという疑問が生じてくる。ここでは、主に名詞修飾節内における「タ形」がどのように解釈されるのかという点について、過去分詞の用法とその機能に具体的に着目していく。

まず、例(6)の場合、日本語と同様に英語においても、主節事態の成立に合わせて現在形あるいは過去形を用いることができる。例(7)も日本語と同様に、英語でも過去形が用いられる。例(8)の場合には、現在分詞 *-ing* (a tapping / a knocking sound on the door) を用いることになる。

イタリア語に訳す場合においても、例(6)では現在形も近過去形も、例(7)では近過去形のみ、例(8)では現在分詞が用いられる。イタリア語の現在分詞も英語の現在分詞も、形容詞的な機能をもっているからである。

このように、用いられる時制形式の選択の点では、日本語と英語・イタリア語のあいだには大きな相違は見られないようであるが、異なる視点から考察すると、日本語と英語・イタリア語のあいだに存在している相違が見られる。例(6)の場合、英語では関係代名詞“that”の使用が必須であるのに対して、例(8)の場合は、関係代名詞の使用は認められない。同様に、イタリア語でも例(6)では関係代名詞“che”の適用が必須であるのに対して、例(8)の場合、関係代名詞は不要である。言い換えると、前者が関係節にシなくてはならない文であるのに対して、後者は関係節にする必要はない。代わりに使われた現在分詞が、「音」の特質を説明している。

以上、例 (6) ~ (8) の訳を考察すると、日本語の「タ形」と英語・イタリア語の「過去分詞」にはいくつかの共通点があると考えられる。まず、どちらも <完了> の意味を表すという点であるが、結論から言うと、日本語の名詞修飾節内の「タ形」も英語とイタリア語の分詞と同様に、<動詞的性質> と <形容詞的性質> の両方をもっていると考えられる。

なお、日本語の名詞修飾節における「タ形」の機能と英語・イタリア語の関係節における「分詞」の機能のあいだに存在する共通点と相違点を明らかにするため、以下に、英語とイタリア語の分詞（現在分詞と過去分詞）における意味とその用法に関して述べる。

安藤 (2005:231) では、英語の分詞には現在分詞と過去分詞の二つがあり、以下の例文から明確であるように、<動詞的性質> と <形容詞的性質> を併せもっているとされている。英語とイタリア語における分詞の用法はほぼ同じであるが、現在分詞の用法に関しては、以下に示すように相違点もある。

I. 動詞的性質

- a. 進行形：John **is working** now. (ジョンは今働いている)
 John **sta lavorando** ora. [現在進行形（現在分詞は用いられていない）] 17)
- b. 完了形：John **has come**. (ジョンがやってきた)
 John **è arrivato**. [近過去形（過去分詞が用いられている）]
- c. 受動態：John **is loved** by Mary. (ジョンはメアリーに愛されている)
 John **è amato** da Mary. [受け身形（過去分詞が用いられている）]

II. 形容詞的性質

(1) 限定的用法

- a. The **following** day was rainy. (翌日は雨だった)

17) イタリア語にも独立した進行形があり、<stare (英: stay) + gerundio (ジェルンディオ)> は最もよく使われる進行形である。「-ando, -endo」で終わる動詞がジェルンディオと呼ばれる動詞の形態である。現在分詞とは異なるものである。

- Il giorno **seguinte** è stato piovoso. (現在分詞＝形容詞)
 b. He has a **grown-up** son. (彼には大人になった息子がいる)
 Lui ha un figlio **creciuto** (**adulto**). (過去分詞＝形容詞)

(2) 叙述的用法

- a. Our math teacher is so **boring**. (私たちの数学の先生は、とても退屈だ)
 La nostra insegnante di matematica è molto **noiosa**.
 (現在分詞＝形容詞)
 b. I'm so very **bored** with myself. (つくづく自分がいやになっちゃった)
 Sono **stufo** di me stesso.

以上の用法は基本的な用法であるが、分詞は英語では「名詞修飾語」としても用いられ、意味により修飾する名詞の前に置かれる場合と後に置かれる場合とがある。例えば、以下の例文¹⁸⁾からわかるように、名詞の「恒常的・分類的特徴」を表す分詞は修飾する名詞の前に置かれるのに対して、名詞の「一時的な状態」を表す分詞は修飾する名詞の後に置かれるという制約がある。

- Mr. Brown is proud of being a **working** man.
 Il Sig. Brown è orgoglioso di essere un **lavoratore**. (名詞)
 [現在分詞不可能]
 (ブラウンさんは、労働者であることを誇りにしている)
- The people **singing** were students. [=who were singing]
 Le persone **che stavano cantando** erano studenti. (過去進行形)
 [現在分詞不可能]
 (歌っていた連中は学生だった)
- The classification **adopted** has lots of advantages.
 [= which has been adopted]
 La classificazione **adottata** presenta molti vantaggi. [過去分詞]
 (採用された分類法にはたくさんの利点がある)

18) 安藤 (2005) 『現代英文法講義』開拓社、pp. 232-234.

分詞の用法を正確に分析するためには、自動詞と他動詞の区別もしなくてはならない。自動詞の過去分詞は場所・状態の変化を表す変移動詞で、「～した」という能動的・完了的な意味を表すが、その数は多くない。例として、a faded flower (しぼんだ花)、a frozen lake (凍った湖) などが挙げられる。上記の例文をイタリア語にすると、形容詞の働きをする過去分詞 (un fiore appassito, un lago ghiacciato) が用いられることとなる。日本語訳を考察すると、すべてが「タ形」となっている。

一方、他動詞の過去分詞には二つの場合がある。動作動詞の場合は、「～された」という受動的・結果的な意味を表す。例として、stolen money (盗まれたお金)、a closed shop (閉められたお店)、lost property (失われた財産) などが挙げられる。それとは異なり、状態動詞の場合は、「～されている」という受動的・状態的な意味を表す。例として、a well-known writer (著名な作家) が挙げられる。イタリア語にすると、すべてが形容詞の働きをする過去分詞 (soldi rubati, negozio chiuso, proprietà persa, scrittore ben conosciuto) となる。

以上のことからわかるように、英語とイタリア語の過去分詞は、日本語では「した」・「された」・「されている」のように訳されるが、日本語の「タ形」にも形容詞的な性質が現れると考えられる。また、次の例文からわかるように、英語の「分詞節」は縮約関係の働きをし、現在分詞も過去分詞も用いられる。この場合、単独の分詞を用いるか関係節を用いるかという選択が認められる。

《現在分詞》Anyone **wanting** a ticket can apply to me.

(= who wants)

(切符のほしい人は、私に問い合わせてください)

《過去分詞》The book **borrowed** from the library was dull.

(= which had been borrowed)

(図書館から借り出した本は退屈だった)

後者をイタリア語にすると、“Il libro preso in prestito dalla biblioteca era noioso.”となるが、英語と同様に過去分詞を単独に適用することが可能である。また、関係代名詞“che”を用いることも可能である。

このように、英語でもイタリア語でも、現在分詞も過去分詞も様々な用法を可能とする

が、本稿において重要なのは「過去分詞」による用法である。なぜなら、日本語の「タ形」といくつかの共通点があり、その共通点とは、〈完了〉という概念を前提とすることと、〈動詞的な性質〉の他に〈形容詞的な性質〉をもつことであると考えられるからである。このことから、なぜ例(3)と(5)が同じく名詞修飾節であるにもかかわらず相違が存在するかわかる。例(5)における「タ形」は「語」としてではなく「節」として名詞を修飾するものであるのに対して、例(3)における「タ形」は形容詞、つまり「語」として名詞を修飾するものだからである。また、例(3)のような「タ形」は英語とイタリア語における〈過去分詞〉のような働きをしているとも考えられる。名詞修飾節の種類や用いられた動詞の性質と意味、また文章の構造などの要因も考慮に入ればさらに正確な結果が得られるが、それは今後の課題としたい。

5. 終わりに

本稿では、日本語の「タ形」とイタリア語の「近過去形」の相関関係に関して述べてきたが、その際にこの二つの時制形式が表す〈完了性〉に着目した。共通点として挙げられるのは、「タ形」も「近過去形」も二重性をもつ時制であるということ、つまり〈完了的な用法〉と〈アオリスト的〉用法を認める時制であるが、本稿では主に前者を対象としてきた。また、本稿では〈完了〉と〈終結〉という用語の区別に関しても触れたが、その際に「タ形」は両方を可能にすると述べた。本稿の主張に従うと、〈完了〉には〈現在における完了〉、〈過去における完了〉、〈未来における完了〉という三つのパターンがあると考えられる。「タ形」は〈現在における完了〉のみを表すことができるが、その用法は単文と複文の一部における用法に限られる。その限られた用法の中に、「名詞修飾節内の「タ形」は、〈未来における完了〉も表す」というものがある。ただし、すべての名詞修飾節における用法ではないことが明らかになった。その場合の名詞修飾節内の「タ形」は、イタリア語と英語の「過去分詞」と同じような働きをしていると考えられる。「過去分詞」は〈完了〉を示唆するものであり、助動詞とともに用いられると「複合時制」というのを形成するが、単独で用いることも可能である。その場合の過去分詞は特定されていない時点(過去、現在、未来)において当該事態が〈完了した〉ことを示唆する形容詞的な働きをしている。本稿で挙げ例文からわかるように、「タ形」も同じような働きをしている。ただし、それに対応できない場合もあるため、「受動態」についても考

慮に入れなくてはならない。つまり、「読んだ本」の場合、「読まれた本」に言い換えることができるが、「私を買った本」の場合、「私に買われた本」に言い換えることはできないということも分析の際に考慮に入れなくてはならない。さらなる分析については、今後の課題としたい。

本稿は、筆者の母国語でもあり、多くの人々に話されているわけではないイタリア語との比較対照を通じて論じたものである。論を進めながら、他の言語の特質について考えることは、母国語を含めて自分がよく知っている言語について、あらためて考察をうながすきっかけになる、ということを深く再認識した。筆者は現在韓国語を勉強しているが、未だ研究に取り入れることが可能な知識を有してはいない。しかし将来は、これまでの日本語とイタリア語・英語・スペイン語の対照研究に韓国語も加え、時制に関する研究に取りくむことを考えている。ひいてはそれが、これらの言語を学ぼうとする日本人学習者のみならず、それらの言語を母国語とする人々が日本語を学習する場合の参考となるよう研究を深めていきたいと考えている。

【参考文献】

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社, pp.232-234
井上優 (2001) 「現代日本語の「た」」 つくば言語文化フォーラム編 『「た」の言語学』 ひつじ書房, pp.97-156
上田博人 (2011) 『スペイン語文法ハンドブック』 Kenkyusya, pp.175-177, 182-192
工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房, pp.61-161
高橋太郎 (2003) 『動詞九章』 ひつじ書房, pp.105-125
長神悟 (2013) 『イタリア語のABC』 白水社, pp.110-113, 159-164
国立国語研究所 (2002) 『対照研究と日本語教育』 くろしお出版, pp.3-20
日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 ③』 くろしお出版, pp.168-176, 154-156

論文投稿日：2017. 03. 13.
論文審査日：2017. 05. 10.
掲載確定日：2017. 05. 10.

 <要旨>

 日本語の「タ形」における <完了性> について
 - イタリア語との比較対照 -

マリアンナ・チェスバ

本稿は、日本語とイタリア語の時制における <完了性> を対象にして、対照言語学的な視点から考察したものである。ただし、必要に応じて英語の時制との比較対照分析も行われる。具体的に、本稿は日本語の「タ形」が表す <完了性> とイタリア語の過去分詞により形成される「複合時制」、主に「近過去形」が表す <完了性> を比較しながら多言語間における相違点または共通点を明確にすることを目的としている。本稿の重点は次の三点である。まず、a. 各時制が表す <完了> と <終結> の区別の必要性、b. 分析に当たっての単文と複文の区別また複文の種類別の区別の必要性、最後に c. 日本語の「タ形」における形容詞的な性質の有無、という三点である。イタリア語および英語の「過去分詞」においても、こういった形容詞的な性質が現れるということを基準にして分析が行われる。このように、この三点を考慮に入れると、日本語の「タ形」が表す特殊な <完了性> が明らかになる。具体的には、「タ形」による <未来における完了>、つまり未来的な用法に関する用法とその制約などが明確になる。

 On the “perfectivity” of the Japanese “-ta” form
 - A contrastive study in Italian and Japanese -

Cespa, Marianna

This study is a contrastive research on the “perfectivity” expressed by some tenses in both Japanese and Italian, but also an explanation about tenses in English will be introduced for further explanations. The aim of this article is to clarify the different points and the similar points between the Japanese “-ta” form and the Italian compound tenses constructed with the past participle. In particular, this article will compare the Japanese “-ta” form to the Italian “Present Perfect (or Perfect tense)”, focusing the analysis first on the “perfectivity” expressed by the “past participle” in the compound tenses and then on its similarities to the “perfectivity” expressed by the Japanese “-ta form”. The main points of this paper are three: a) the necessity of making a distinction between the terms “completion” and “termination”; b) the necessity of a distinction between simple sentences and complex sentences, but also of a further distinction among the several types of compound sentences; c) the function of “-ta” form as adjective, as for the “past participle” in Italian and English. By considering these three points, it becomes clear the multiple function of the “perfectivity” of the “-ta” form, in particular its use and its restrictions as a “future-form”, which means as action that could be “completed in the future”.